

**「龍馬を斬る 誰が龍馬を殺したか」**黒鉄ヒロシ／著 小池書院 2007年7月発行  
2階郷土資料コーナー(請求記号:K726-145)

去年(2007年)は、坂本龍馬と中岡慎太郎が京都近江屋で暗殺されてから丁度140年目にあたっていた。それにしても不思議なのは、事件後140年を経てもなお、龍馬らを襲った刺客の正体が明らかでないことである。真犯人をめぐる様々な仮説が出されているが、中には素人から見ても奇説・珍説と思えるものも少なくない。

本書では、『坂本龍馬』、『新選組』、『幕末暗殺』などの幕末史をテーマにした一連の作品で、いわゆる「歴史」のスタイルを確立した黒鉄ヒロシが、それらの諸説を吟味し、坂本龍馬暗殺の真犯人を推理していく。大本命である薩摩藩説はもちろんのこと、新選組説、土佐藩説、フリーメーソン説に、中岡慎太郎説まで、様々な仮説が取り上げられ検討される。龍馬暗殺当時の有力な証言者である菊屋峰吉の証言の矛盾なども鋭く指摘される。

本書を読んでいて痛感するのは、史料を読む面白さと怖さである。同一の史料、証言であっても、読み方によって如何様にも解釈が変わっていく。逆に言えば、だからこそ、これだけ多くの犯人像が生まれてくるのだとも言えよう。扱っているテーマが血生臭いのにも関わらず、本書の読後感がさほど暗いものにならない。なんとと言っても龍馬らの喋る「土佐弁」の御蔭であろう。黒鉄さんならではの、あけっぴろげな土佐弁のやり取りを読んでいると、「まっこと坂本のオンチャンが喋りよったにかあらん」と思えてくる。

余談ではあるが、本書冒頭の龍馬暗殺時点での幕末人物相関図を見ると、いつのまにやら幕末のオールスターの殆どが自分より年下になっている。もう上には西郷どん(40)か勝先生(45)、容堂さん(40)しかいない。薄々気が付いていたとはいえ、改めて自分の未熟さを思い知らされるのであった。

**「『大きなかぶ』はなぜ抜けた？謎とき 世界の民話」**小長谷有紀／著 講談社 2006年7月発行  
2階一般開架図書(請求記号:S/388)

「おおきなかぶ」といえば、ほとんどの人がそのあらすじを頭に思い浮かべることができるような有名なロシアの昔話です。その物語を読んでいて、大きなかぶはなぜ抜けたの？なぜ「かぶ」なの？と疑問に思ったことはありませんか？また中東のお話によく出てくる「魔法のじゅうたん」はなぜ飛ぶの？とか、グリム童話でおなじみの「ヘンゼルとグレーテル」では、なぜ森にお菓子の家があるの？など、世界中の昔話には疑問が尽きません。

この本はそんな世界中の昔話や民話の謎を取り上げて、それぞれの国の風習や時代背景から解き明かしてくれています。読み進むうちに、世界中の人々の間で今日まで傳承されてきた昔話や民話がいかに多様で面白いものであるかということが伝わってきます。昔話や民話などは子どものためのものと思われがちですが、編者が「・・・物語の世界はそもそも大人たち同士が互いに楽しむこともできる領域だった」と言っているように昔話や伝説など傳承されてきた物語は子どもが聞き手であるとは限らなかったようです。

普段、子どもに絵本を読んで聞かせている人たちだけでなく、絵本に接する機会のないような人にも楽しんでもらえる一冊だと思います。